



君に会ひたい。

◎特別寄稿

言葉を旅する
文月悠光

◎テーマ展示

「君に会ひたい。
——中原中也の友情」

◎企画展

「〈汽車が速いのはよろしい〉
——中也の詩と乗り物」

「中也の住んだ町——鎌倉」

◎特集

「おうちで中原中也記念館
——オンライン発信の取り組み」

◎記念館ニュース

主なできごと(2020年度行事記録)
第26回中原中也賞受賞作品
2021年度 行事予定

中原中也記念館 館報2021

26

Public relations magazine
第26号

Nakahara Chūya Memorial Museum

言葉を旅する

text=FUZUKI Yumi
文月 悠光



旅の思い出と、その道中で読んでいた本の記憶が結びつくことがある。私の場合、その一つが中学三年の修学旅行と、中原中也の詩集だ。

中学三年の春、修学旅行のお供に中也の詩集を選んだ。隣席でまたたくストロボの青白い光よりも、青函トンネルのざわめきよりも、小さなリュックに詰めた『中原中也詩集』と『現代詩手帖』が私の胸を高鳴らせていた。列車内でトランプをする合間、ページをめくれば、たちまち周囲の騒ぎは静まり返り、私の目の前に一篇の詩が立ち現われる。ざらついた紙の手触りと共に、詩の声は、肉体へひりひりと染み込んでいくよう。

恍惚とした当時の記憶。でも今となっては笑えてしまう。十四歳の私が唯一持っていた中也の詩集は、近所のダイソーに並んでいた大創出版の文学シリーズだった。限られたお小遣いで、郊外在住の私が中也にアクセスしようとした結果、行き着いた場がなんとダイソーだったのだ。そんな中也賞詩人がどこにいたのか。あまりに残念で、後ろめたくて、今に至るまで白状できなかった。けれど『山羊の歌』も『在りし日の歌』もその一冊で初めて読んだ。

高校進学後は、行動範囲が広がったことで、街の書店で中也の詩集を買った。なぜ初めからそうしなかったのかと、ちよつぱり後悔もした。けれど未だに、中也と聞いて思い出すのは、あの手触りの悪いザラ紙の詩集と、修学旅行の列車内の喧騒だ。ごわごわした紙の感触が今となっては懐かしい。

修学旅行から十年後の二〇一六年のこと。山口市立阿東中学校の教室を訪問し、詩の公開授業のゲストティーチャーを務めた。対象は二年生の全生徒、十七名。山間に立つ学校に通う彼らの多くは、保育園から一緒の幼なじみだという。

授業で扱う教材は、中原中也記念館二〇周年を記念して発行された『中也読本』。十三篇の中也の詩から選んだ一篇について、生徒それぞれが発表を行う。

まずは四つの班に分かれて、自分が選んだ詩の良さを、同じ班のメンバーにプレゼンする。中には、その場で絵に描いて伝えようとする子も。それぞれが「音読する」「書き写す」などの作業を経て、詩を深く読み込んでいた。「五音、七音の繰り返しだね」「なんでカタカナなの?」「どんな気持ちで

書いたと思う?」。自分たちで答えを見つけようと、机をくつつけ、顔を寄せ合い、一心に話し込む様子が微笑ましい。

「では全員の前で発表したい人!」。最前列の男子が、真っ先に手を挙げた。先生が「いつもは手が挙がらないのに」と驚いている。生徒の疑問に対して、私が少しコメントを加える。小さな一言を拾い上げ、真剣に頷き、ノートに書き入れる生徒たち。「素直って偉大だ」と彼らの澄んだ目を見て実感した。そして、教室という場で中也の詩に出会える子どもたちはなんて幸運なのだ

ろう、と自分の乏しい経験を省みた。

授業を担当した牧野校長先生(当時)はこんな風に語っていた。「あの子どもは、どんな人が来ても大丈夫なんです。大人を信じてるから。信用を得るまでが何より大変だし、時間がかかります」。先生たちの日頃の努力、厚い信頼があつてこそ実現した、奇跡のような授業だった。

「人間で感覚が一番鋭いのは中学二年生!」と断言し、生徒を全力で賞賛する牧野先生。十四歳って、未完成の完成品という感じだ。「教えた」のではない、私が教わり、学んだ時間だった。



公開授業「言葉と出会う〜詩と人と」(2016(平成28)年2月3日、山口市立阿東中学校)筆者(左)と牧野智治先生



風景画像 (p.1~4) 一秋吉台・秋芳洞 (山口県美祿市) にて 撮影:筆者

何はともあれ、私もまた「感覚が鋭い」時期に詩と出会い、詩を書きはじめた。その偶然を感謝しなくなった。十歳で詩を書き始めて二〇年近く経つ今、確実に言えるのは、どんな形であれ、まず詩に出会ってみる、それが何より大切だということ。

あの授業を受けた子どもたちも、今年で十九歳になる。コロナ禍の不安を跳ね除けながら、それぞれの進路を決定した頃だろうか。大人になって味わる詩もたくさんある、むしろ大人になってからのの方が俄然、詩は面白い。人生のどこかで、詩の言葉にふたたび迷い込んでみて欲しい。

千の天使が

バスケットボールする。

私は目をつむる、

かなしい酔ひだ。

もう不用になつたストーヴが

白つぼく錆びてゐる。

「宿酔」

十四歳のとき、真っ先に覚えた詩句
〔千の天使が／バスケットボールする〕。

当時思い描いたのは、日溜まりのなかで天使たちがボールのように戯れる、まぶしい祝祭のイメージだった。

一方、子どもの私は「宿酔」の意味を理解できなかった。お酒の味も、酔った感覚も知らずに（かなしい酔ひ）があるのかと首をひねった。今ならわかるような気がする。退廃的な感情に酔いしれる心地よさを知っているから。大人になった私が今読んで惹かれる中也の詩は、美しい情景ではなく、人間としての生々しさ、弱々しさを切り取った作品なのだった。

さてどうすれば利するだらうか、とかどうすれば晒はれないですむだらうか、とかと

要するに人を相手の恩恵に
明けくれすぐす、世の人々よ、

僕はあなたがたの心も尤もと感じ
一生懸命郷に從つてもみたのだが

今日また自分に帰るのだ
ひつばつたゴムを手離したやうに

「憔悴」

詩「憔悴」内のこの呼びかけは、（世の人々）に対する最大の皮肉であると同時に、（世の人々）の意見に度々違和感を持つ私にとって、ずいぶん慕わしいものを感じられる。

詩作の合間、繰り返し考えることがある。詩を書けば、遠くにいる誰かの悲しみには寄りそうことができる。しかし身近な人を幸せにできているだろうか。作品と実人生を往復する過程で、



「中原中也賞の20年一受賞詩人による記念シンポジウム」
(2015年4月29日)
右から筆者、三角みづ紀さん、佐々木幹郎さん(司会)

フィジカルな移動を伴わなくても、旅情はかきたてられ、人は見えない世界を想像することをやめない。

過去にとらわれ、先の見えない未来を恐れる二十九歳の私に、「空を見ろ」と中也の詩が笑いかけている。

二〇一五年、中原中也賞二〇周年記念シンポジウムに登壇した翌日、飛行機の時間まで観光をしようと、秋吉台を黙々と歩いた。春の風と、生い茂った草の匂い。岩に触れながら歩き、秋芳洞へ向かう。青い水面を覗き込むと、透明と青色は境目なく混じり合い、眼下に揺れていた。歩きながら触れた景色を残そうと、秋吉台で詩を書きとめた。

見てきたことを話すため
陽光に深く息をした。

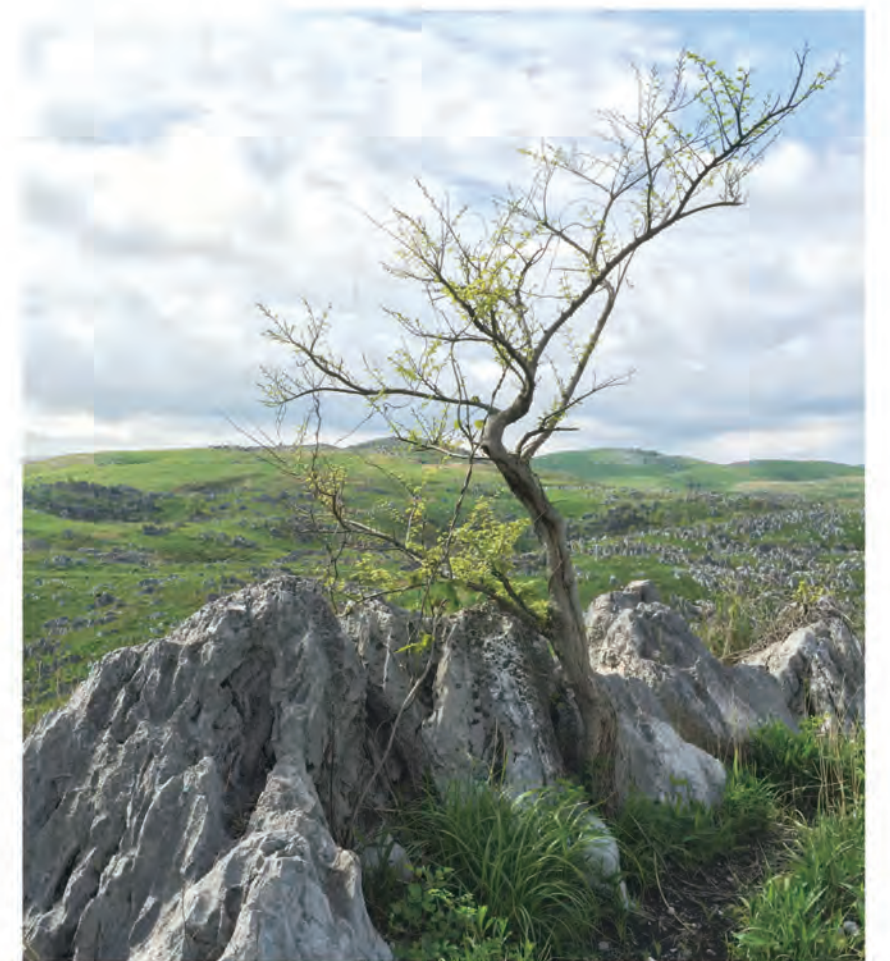
ひとつの石にも物語がある。
石のとなりで膝を抱えて
濃くなつていく草の色に目を細めた。

わたしの記憶を洗ってくれる
見えない腕に身をゆだねたくて。
この惑星取り巻く雲よ
わたしのからだを包み、
うっすらと紙め上げてください。

青く美しい揺りかごで育った、
わたしは地球の子ども。

「地球の子ども」抄

そのときのシンポジウムでは、三角みづ紀さんの「中也賞に育てられた



自分は大切な何かをごまかしてはいないかと。苦勞や現実を知ること、詩を書くための必要条件ではない。けれど、実人生ではそれらと対峙せねばならない。耐えられるだろうか？ 自らに問う。

そんなとき（ひつばつたゴム）のようになんか頼りなく思えるのだ。己を支えてくれる言葉を求めて、手元に詩集を引きよせる。

賞の価値を高めるのは自分、という意識を受賞者は持ち続けるべき。佐々木幹郎さんの「どれだけ長く活動しても、山口に来たら新人に戻れ」という言葉を胸に刻んだ。

二〇二二年現在、自粛生活のさなかで過去の旅路が懐かしくなる。とにかく安心して移動できる世の中になることを祈るばかりだ。

夏が来た。
空を見てると、
旅情が動く。

「日記（雑誌帖）」1936（昭和11）年6月23日



撮影:石垣星児

文月 悠光 (ふづき・ゆみ)
詩人。1991年北海道生まれ、東京在住。中学時代から雑誌に詩を投稿し始め、16歳で現代詩手帖賞を受賞。高校3年のときに発表した第一詩集『適切な世界の適切な私』（思潮社）で、中原中也賞、丸山豊記念現代詩賞を最年少18歳で受賞。そのほかの詩集に『屋根よりも深々と』（思潮社）、『わたしたちの猫』（ナノク社）。エッセイ集に『洗礼ダイアリー』（ポプラ社）、『臆病な詩人、街へ出る。』（立東舎）がある。2020年、第一詩集の増補版がちくま文庫になり再び話題を集める。NHK全国学校音楽コンクール課題曲の作詞、詩の朗読、詩作のオンライン講座を開くなど広く活動中。

君に会ひたい。

— 中原中也の友情 —

2021年2月17日(水)〜2022年2月13日(日)

※特別企画展期間(7月29日〜9月26日)を除く



展示 3 手紙からあふれる思い

中也は筆まめで、友人たちにたくさんの手紙を書いています。時には自分の詩を同封することもありました。中也にとって手紙は、単なる連絡手段にとどまらず、より深く相手と理解し合うための自己表現の場でもありました。また、中には愚痴をこぼしていたり、酔った時のお詫びを書いていたりと、送る相手によって、中也が見せる顔も様々です。

展示3では、現存している手紙の中から、正岡忠三郎、竹田鎌二郎、安原喜弘宛のものを取り上げ、手紙を通じて交友を紹介しました。



○中原中也ってどんな人？ — 友人たちが語る、詩人の素顔

中村光夫、古谷綱武、野田真吉ら友人たちの中也に関する証言・思い出話などを引用し、中也の人物像を浮かび上がらせました。

【主な展示資料】

中原中也詩集『山羊の歌』『在りし日の歌』、『山羊の歌』葉、中原中也原稿『小林秀雄小論』『河上に呈する詩論』『玩具の賦』、大岡昇平『中原中也』『俘虜記』、高森文夫詩集『浚渫船』、中村稔宛関口隆克書簡、小出直三郎原稿『けんかでない絶交』、野田真吉『中原中也 わが青春の漂泊』、古谷綱武『作家の肖像』、中村光夫『今はむかし(ある文学的回想)』



中原中也にはたくさんの友人がいました。互いの文学観や芸術観をぶつけ合う仲間もいれば、ともに生活をしたり旅行したりする気の置けない友もいました。酒の席で激しく喧嘩したり、「訪問魔」といわれるほど頻りに家に押しかけるなど、友人たちを困惑させることも多かった中也ですが、一方で、非常に礼儀正しく、繊細な一面も持っていました。そんな中也の姿を、多くの友人たちが印象的に語っています。また、中也の詩の紹介に尽力したのも、友人たちでした。寂しがりで、常に友人を求め、相手とより深く理解し合いたいと願っていた中也。

展示1では、その三人を取り上げ、中也の手紙や作品を通して、文学と友情との関係を探りました。

展示 1 文学を通じて

中也には、文学や芸術を論じ、時には酒を飲みながら議論に花を咲かせ、お互いの考えを激しくぶつけあう文学仲間がたくさんいました。中也は、自分の詩を理解してくれる友人を切に欲し、直接相手の家に押しかけて熱弁をふるったり、共に同人誌を発行したり、詩や手紙を送って自分の詩の世界を伝えようとした。そのなかでも特に関係が深かったのが、小林秀雄、河上徹太郎、大岡昇平

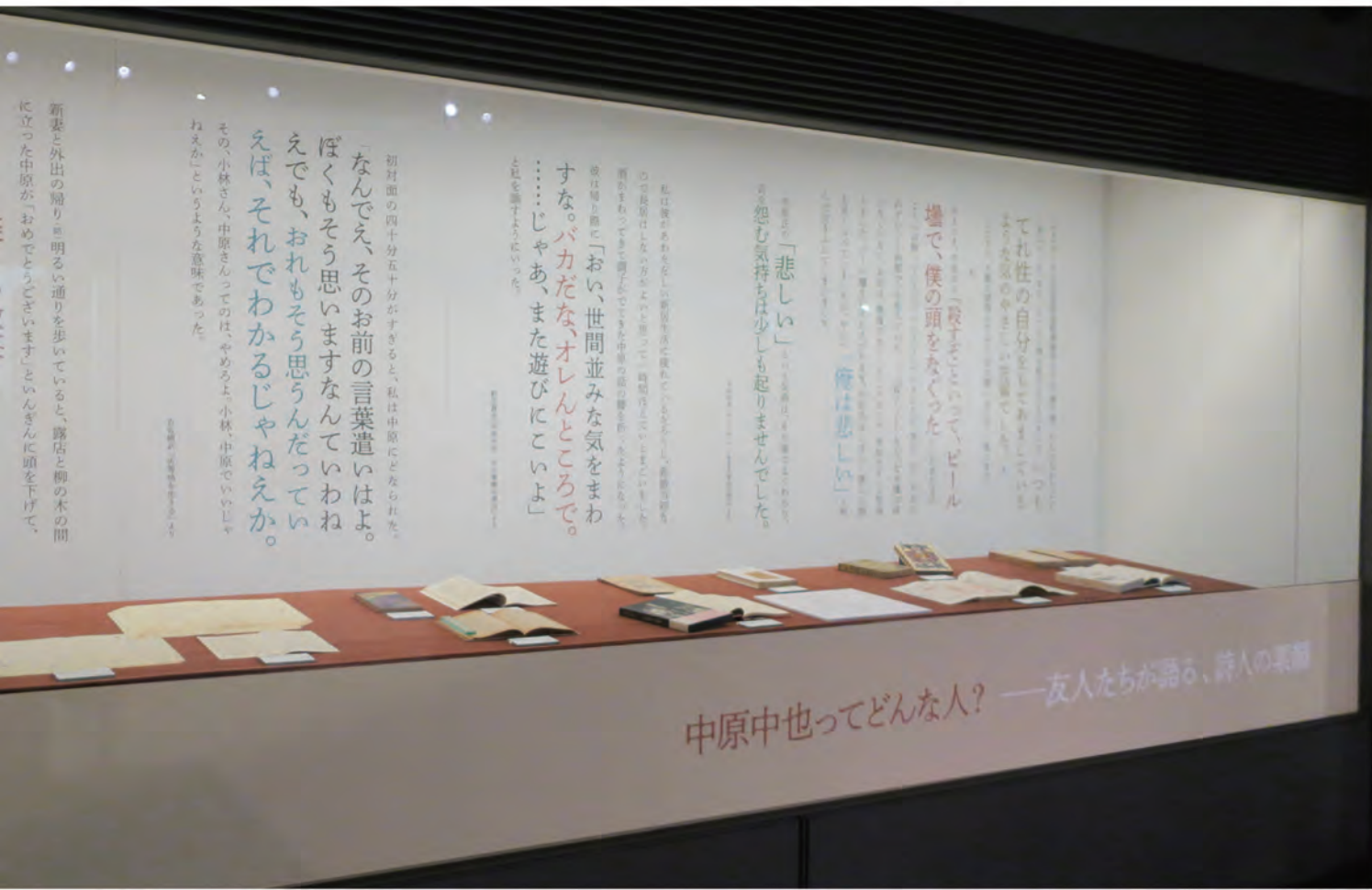
展示 2 一緒に生活 / 一緒に旅行

中也には、文学的な面だけではなく、一緒に旅行したり、共同生活を送ったことがある友人もいました。彼らとの交友は、文学を通じてぶつかり合う関係とはまた違った、気安く親密な一面を持っていました。

展示2では、ともに九州旅行をした高森文夫、一緒に生活をした関口隆克とのエピソードを取り上げ、一人の友人としての、日常的な中也の姿に迫りました。



中原中也ってどんな人？ — 友人たちが語る、詩人の素顔



「汽車が速いのはよろしい」

——中也の詩と乗り物

2020年5月19日(火)～11月15日(日)

中原中也が生きていた昭和初期は、交通網が発達し、鉄道の高速度が進んだ時代でした。山口では妻と幼い息子とともにガソリンカー（ガソリンで走る鉄道車両）で移動したり、東京では雑誌「文学界」の仲間たちとタクシーに乗って飲みに出かけたりするなど、様々な交通手段が中也の生活を支えていました。

展示 1 鉄道

中原中也が上京した1923（大正14）年、東京では山手線の環状運転が開始され、1927（昭和2）年には、浅草―上野間に日本初の地下鉄が開通。都心と郊外を結ぶ路線も次々と増設され、鉄道が目まぐるしく発達してしました。

一方、日本各地で鉄道網が整備され、中也は山陽本線を使って山口―東京間を移動していました。また、鉄道網の発達に伴って食堂車も走るようになり、中也も利用していました。

ここでは、「東京の鉄道」、「東京・山口往復―長距離移動手段としての鉄道」、「食堂車」3つのパートに分け、当時の交通事情や汽車の車内を紹介しながら、中也の日記や作品に描かれる鉄道の実相を探りました。

展示 2 汽船

中也は生まれてまもなく、中国の旅順に単身赴任していた父・謙助と暮らすため、母・フクに抱かれて門司から汽船に乗って大連に向かいました。のちに、そのときの思い出話を繰り返し聞かされた

展示 3 飛行機

中也は、その内容が幼年期の原風景となり、詩のモチーフの一つとなりました。ここでは、当時の汽船や、中也の詩に多く描かれる汽笛についても紹介しました。

中也が生まれた3年後の1910（明治43）年、日本で初めて動力飛行機が空を飛びました。これを皮切りに飛行機の開発が進められ、中也も中学生のときに山口ではじめて飛行機を見たといわれています。

ここでは、日本における飛行機や飛行場の歴史をたどりながら、中也の詩における飛行機のイメージを探りました。

展示 4 自動車

中也が生きた昭和初期は、個人で自動車を所有する人はごくわずかですが、自動車に乗る機会がバスやタクシーを利用する際に限られていました。

ここでは、中也が利用した円タク、往診に来た医者に乗っていたダットサンなど、当時の自動車について紹介しました。

【主な展示資料】
中原中也原稿「（ともかくにも春である）」、「夜汽車の食堂」、「嘗てはラムプを、とぼしてゐたものなんです」、「童謡」「一つの境涯」、「脱毛の秋」、東松軒和食堂車チラシ、安原喜弘宛中原中也書簡（1932年7月27日）、日本航空輸送「旅客郵便貨物定期交通案内 附時間表」、映像「銀座新景」（昭和館蔵）



中也の住んだ町——鎌倉

2020年11月18日(水)～2021年4月11日(日)

1937（昭和12）年2月、中原中也も東京・市谷から鎌倉の寿福寺境内に建つ借家に転居します。その3か月前、長男の文也を病で喪った中也は、衝撃で心身を病み、約2ヶ月間入院。鎌倉への転居は、愛児との思い出が色濃く残る東京での生活を望まぬゆえの決断でした。以後、その年の10月22日に亡くなるまで鎌倉で暮らしました。

本展では、中也が鎌倉の日々を綴った「ボン・マルシェ日記」や書簡、鎌倉で制作された詩などを通じ、中也が鎌倉で過ごした最期の238日間とはどのようなものだったのか、その軌跡を辿りました。協力・鎌倉文学館

友人たちが見た鎌倉の中也

鎌倉には小林秀雄、大岡昇平といった中也の親しい友人が暮らしていました。日記には友人たちの名前が頻りに登場し、互いの家を行き来する様子が記されています。友人たちの回想録からは鎌倉での中也の姿を知ることができます。

鎌倉での暮らしぶり

読書家の中也は鎌倉でも読書に耽り、特に精神医学や哲学、宗教の本を多数読む様子からは、自らの心の状態を理解しようと努力していた中也の姿がうかがえます。また、空気銃を持って山や神社を歩いたり、友人たちとドミノなどの遊びに興じたりすることもありました。日記にはそのような中也の普段の暮らしぶりが淡々と綴られています。

鎌倉での詩作／フランス詩への情熱

文也の死によって心に深い傷を負った中也でしたが、詩作から離れることは決してありませんでした。鎌倉在住時には「春日狂想」など、新たに16篇の詩を制

作しています。

また、フランス詩の翻訳やフランス語の勉強にも意欲を燃やし、9月には「ラ・ボオ詩集」を刊行。中也が生前に出版した最後の書籍となりました。

望郷／詩集『在りし日の歌』／終焉

鎌倉で生活していくなかで、中也はかねてから抱いていた帰郷の願望を募らせ、7月頃には、秋に山口へ引き揚げる決意を固めます。

9月、中也は第二詩集『在りし日の歌』の原稿の清書を完成させ、小林秀雄にその原稿を渡し、詩集の出版を託します。

しかし、念願の帰郷を間近に控えた10月5日、中也は結核性脳膜炎を発病。翌日、鎌倉養生院に入院しますが、同月22日、30歳でこの世を去りました。鎌倉の地で茶毘に付され、遺骨となって故郷・山口へ帰った中也は、現在、山口市吉敷の経塚墓地にある「中原家累代之墓」で静かに眠っています。



【主な展示資料】
中原中也「ボン・マルシェ日記」、原稿「秋の夜に、湯に浸り―四行詩」、鎌倉の家で使用した表札、中也が使用していた空気銃の弾の缶、中原中也『在りし日の歌』、中原中也詩集『在りし日の歌』、第4巻第5号（春日狂想 掲載）、昭和初期の鎌倉の映像（提供・観音ミュージアム（鎌倉長谷寺境内）、石渡源三郎氏）



おうちで

中原中也記念館

オンライン発信の取り組み

新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響は、2020（令和2）年1月以降国内でも次第に顕著となり、感染拡大防止のため社会生活に様々な制約が課される状況が続いています。中原中也記念館でも、休館、入館制限、企画展やイベントの中止や延期など、活動に大幅な変更を余儀なくされました。

こうした状況の中で、従来は対面で行ってきたイベントをインターネット上に置き換えたり、SNSを通じて新たなコンテンツを提供したりする活動に力を入れています。コロナ禍が収束したら記念館へぜひ行ってみたいと感じていただけるように、中也の、そして詩の魅力をオンラインで発信する取り組みをご紹介します。

2020年
4月29日

おうちで 中原中也生誕祭

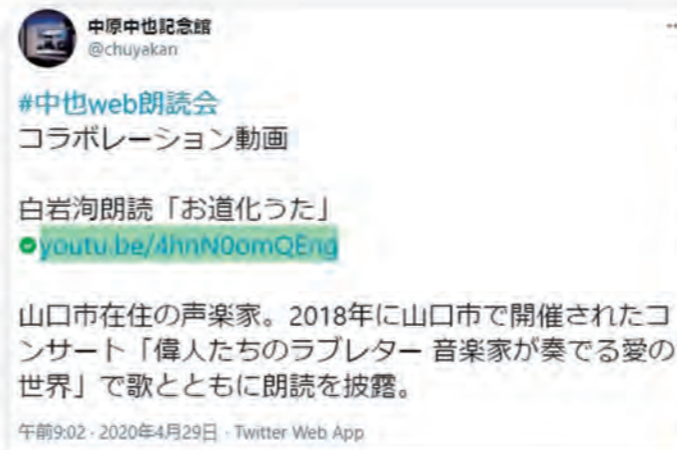
中原中也の誕生日である4月29日に毎年開催している「中原中也生誕祭」ですが、昨年は延期となりました。そこで、ステイホーム生活の中でも中也の誕生日をお祝いできないかと企画したのが、「おうちで中原中也生誕祭」でした。その内容は声を通じて参加する「#中也web朗読会」と文字を通じて参加する「お祝いメッセージ」の二種類です。

「#中也web朗読会」は、記念館前庭で行う自由参加の朗読会「空の下の朗読会」の代わりとして、twitterに中也の詩や自作を朗読した動画を共通のハッシュタグをつけてアップしていただいた他、コンサートの代わりとして、これまで生誕祭に出演されたミュージシャン、企画展に作品を提供していただいたアーティスト、中原中也賞受賞詩人、山口市内で活動するアーティストの皆さんに呼びかけて、ご提供いただいた動画を「コラボレーション動画」として記念館から配信しました。一般の方から93件もの朗読が寄せられ、ゲストからの20の動画など141件のツイートで、中也の誕生日をお祝いしました。

「お祝いメッセージ」には、インターネットと手紙による計175のメッセージが寄せられました。いずれも中也への思いが熱く綴られた内容で、国内だけでなくフィリピン、スペイン、メキシコ、エジプト、インドネシア、中国、ドイツといった海外から届けられたメッセージもあって、望外の喜びでした。これらのメッセー



ジは公式ウェブサイト上で期間限定で公開しました。



2020年
5月スタート

YouTube 動画公開



中原中也記念館
YouTubeチャンネル

全国への緊急事態宣言発出を受け、当館は2020年4月13日から5月18日まで36日間の休館となりました。開館再開後も、遠方からの来館は難しいことも考えられ、展示の一部をご紹介する動画や資料・記念館の仕事を知っていただく動画を作成し、YouTubeを活用して情報発信を行っています。

「展示を見ていただきたい」「動画が中也に興味を持つきっかけになれば」と、休館を余儀なくされた状況だからこそ見直した思いを胸に、初めてのことに試行錯誤しながら、構成・撮影・編集を行いました。中也、「最接近！」というシリーズでは、一つの資料を深掘りすることにより資料のおもしろさや重要性を伝えるという観点から、資料にカメラを近づけ、資料内部や裏面を撮影したり、展示では紹介しきれない詳細な情報を紹介したりしました。来館時とは違う視点で資料を見ることができると、来館された方も再度動画で見る面白さがあるというメリットも発見できました。

今後、動画コンテンツの教育現場での活用や「ポケット学芸員」での利用の可能性を探っていきます。記念館職員の思いのつまった動画をぜひご覧ください。



2020年
6月スタート

CHUYA STATION



twitter

毎月2回ほど金曜日に、twitterを利用して、中原中也に関する情報をラジオ番組風にお届けする企画「CHUYA STATION」を質問フォームに寄せられた皆様からの質問に答えながら、リスナーと交流することを目的としています。中也に関する疑問や中也ファンとして気になっていることにお答えするだけでなく、インターネット上や巷にまことしやかに流れる中也に関するうわさの真偽にも迫っています。

これまで「中也の好んで飲んでいたお酒の種類は？」「中也は小柄だったというけれど、実際の身長は？」「中也は料理上手？」など中也自身についての質問だけでなく、「中也の好きな作家、あこがれの人は誰？」「奥さんの孝子さんとの仲はどうだった？」など中也を取り巻く人々についてのお便りも寄せられています。リスナーから質問を直接受け、それについて職員や展示に関わる学芸員の生の声で回答する定期的な発信ツールとして活用し、わかりやすくお伝えするために工夫を重ねています。また、普段は文字情報中心の文学館から、音声としても情報を発信し、気軽に中也に興味を持ってもらえるきっかけになればとも思います。

金曜日に現れる、140秒の小さな情報局。#CHUYASTATIONで過去の放送を聞くことができます。

2020年
9月12日

公開講演

CHUYA STATION

例年、中原中也の会との共催で行われる公開講演も、同会の大会がオンライン開催になったため、インターネットを通じて視聴する方式で行われました。詩人トーク「詩はどこへ向かうのか？」——2020年に読む中原中也」と題して、カニエ・ナハさん、杉本真維子さん、三角みづ紀さん、四元康祐さんの4名が、蜂飼耳さんの司会で、それぞれの最近の活動やコロナ禍で読む中也の詩について語り合うという内容で、132名の参加がありました。その内容は8月31日発行予定の「中原中也研究」第26号に掲載される予定です。



ウェブ会議ツール Zoom を使い、記念館で長年続けている「中原中也を読む会」をオンライン向けにアレンジし、中也の詩を基礎に新たなアート・コミュニケーションの場として、堅くきず、楽しみながら詩を読む体験を提供できれどと考へ出したのが今回の企画です。

今回の参加者は関西圏の4名、記念館側から山口弁・長崎弁の2名で、中也の詩「詩人は辛い」「帰郷」を自分の話せる方言に翻訳し、実際に朗読しました。

方言で「詩人は辛い」の題名を翻訳すると、「詩人はえらい」「詩人は難儀や」(大阪弁)「詩人ちゅうんはえらい」(山口弁)「詩人はつらか」(長崎弁) 自分の気持ちを吐露するこの作品を、口語に近い形にしたり、(私)を自分自身に置き換えて、一人称を女性が使用する「うち」や「あたし」にして翻訳したりという工夫がありました。

「詩人は辛い」大阪府・河内弁バージョン

詩人は難儀や

わいはもう歌なんか歌わひん
誰が歌なんかうとたるか
おのれらは歌なんぞ聴いとれへん
聴いとるようなふりだけはしよる
みーんなただちべたい心を持つとって
歌なんてどないかてかまわへんのや

せやのに聴いとるようなふりはしよる
ぼんでめちやくちや拍手を送るがな

拍手を送ってきよるからもひとつうとたろ
けえつてなつたら
もう堪忍やあつてツラ

わいはもう歌なんか歌わひん
こんな殺生(せうじやう)な世の中に歌なんか歌わんど

中也の詩を方言に翻訳すると、もちろん中也の詩のリズムは崩れてしまいます。一方で、方言の持つ独特のリズムを感じ、その違いをみることで、中也の詩のリズムの特徴や魅力を相対的な視点からとらえなおすことができます。

翻訳には必ず翻訳者の解釈が反映するので、翻訳する場合も詩を読む場合も、言葉ひとつひとつの読みを深めることにつながります。

例えば、「帰郷」では、第3連(心置なく泣かれよと/年増(としぞ)の低い声もする)が様々なニュアンスで訳されました。

- 「心置なく泣きやええと」 (京都弁)
- 「なんも気にせんと泣いたらええゆうて」 (奈良弁)
- 「ええから好きに泣きいって」 (大阪弁)
- 「すつきやなだけ泣いてみと」 (山口弁)
- 「どねえも気がねをせんとお泣きんさんせと」 (山口弁)
- 「気にせんでいくらでん泣かんねつて」(長崎弁)
- 「吹き来る風」の問いかけとの対比が鮮明に感じられました。

「帰郷」山口県・山口弁バージョン

いなかにきやーる

柱も叩土(たたき)もよう干ちよる
今日はええおひよりであります

えんたの下じゃあ蜘蛛(くま)ん巢(ね)が
しんきそうに揺れちよる

山じゃあ枯れ木も いきよーしよる
ああ今日はほんええおひよりじゃ

道のねきの草影が
ほうこのような怒い顔をしよる

こねえなそがうちらあの「いなか」いーね
ええあんばいに風も吹いちよる

どねえも気がねをせんとお泣きんさん
せえと
ふけたおなごしの低い声もしよる

ああ おんしはどねえなことおしちよつたんか
吹いてきよる風がうちらあにいよるそ
と……

参加者のみなさんが方言で朗読する声があたたく感じられたのは、それぞれに中也やふるさとを思いながら翻訳し、朗読していただいたからだと思えます。コロナ禍の日常でこころがほめていくような素敵な時間となりました。



News! 記念館ニュース

第5回 ぼうしの詩人賞 「あつまれ! 未来の中也たち!」

「ぼうしの詩人賞」あつまれ! 未来の中也たち! は山口市内の小・中学生が「中原中也」や「詩」に触れる機会をつくるために、2016(平成28)年に創設された創作詩のコンクールです。今回は第5回を迎え、昨年の約7倍にあたる542篇の応募作品の中からぼうしの詩人賞(最優秀賞)1篇、優秀賞4篇、館長賞5篇が選ばれました。

コロナ禍の日常を描く作品も多いなか、それでも変わらない子供たちの健やかな視線が詩の中に見られ、有意義な審査会となりました。今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、初めて記念館以外の会場、クリエイティブ・スペース赤れんがで表彰式、作品朗読会を行いました。ぼうしの詩人賞には、中也がかぶっていた帽子にそっくりの黒い「詩人のぼうし」が贈られ、表彰後、朗読を好んだ中也にならないそれぞれが自作の詩を声にのせました。「言葉を生に出す」という行為が、子供たちの声がこちよく参加者の耳に届きました。詩に親しんだ経験が、小さな詩人たちの心に広がり続けるよう願っています。

※今年度から記念館WEBページにて、過去の入選作品がご覧いただけるようになりました。



ぼうしの詩人賞
あつまれ!
未来の中也たち!

- ぼうしの詩人賞・最優秀賞
梶井 春香 さん
- 優秀賞
市川 凜空 さん
井上 あみ さん
檜原 仁 さん
柳田 晟志 さん
- 館長賞
木村 咲衣 さん
佐田 真優 さん
中川 史香 さん
藤田 そら さん
山之内 那知 さん

山羊の日

1934(昭和9)年12月10日、中原中也の第一詩集『山羊の歌』が、編集開始から2年半の月日を経てようやく刊行されました。中原中也記念館では、中也にとって記念すべきこの日を「山羊の日」と名付け、「山羊の歌」にちなんだ特別展示を行っています。5回目となる今年度の特別展示では、『山羊の歌』冒頭に収められた詩「春の日の夕暮」の原稿「春の夕暮」を紹介しました。

「春の日の夕暮」の初稿は、1924(大正13)年、詩の創作ノート「ノート1924」に書かれました。この原稿はそれから8年後の1932年、中也が『山羊の歌』の印刷用原稿を準備する際、清書前の下書きとして制作したものであると考えられます。未発表小説「青年青木三造」が書かれた原稿用紙の裏に記されており、タイトルは詩集収録時に「春の夕暮」から「春の日の夕暮」へと改題されました。

なお、この原稿は1972年の火災により大きな損傷を受けましたが、2017年に修復を行い、展示が可能な状態によみがえりました(展示期間12月1日〜13日)。
また「山羊の日」のイベントとして、12月12・13日には、先着10名のご来館者に人気グッズのまめほん「山羊の歌」、ご来館者全員にオリジナルポストカードをプレゼントしました。



山羊の日 特別展示

2020年4月1日	特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続) 当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介
13日	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため休館 (～5月18日)
29日	おうちで中原中也生誕祭(オンライン) #中也web朗読会、お祝いメッセージ募集
5月19日	企画展Ⅰ「(汽車が速いのはよろしい)——中也の詩と乗り物」 (～11月15日)
6月26日	第190回 中原中也を読む会 企画展Ⅰ「(汽車が速いのはよろしい)——中也の詩と乗り物」見学
7月24日	第191回 中原中也を読む会 蓄音器で聴く中也ゆかりの音楽 (YCAM)
8月28日	第192回 中原中也を読む会 第25回中原中也賞受賞詩集 水沢なお「美しいからだよ」を読む
31日	機関誌「中原中也研究」第25号発行
9月12日	公開講演 詩人トーク 「詩はどこへ向かうのか?——2020年に読む中原中也」(オンライン) カニエ・ナハ×杉本真維子×三角みづ紀×四元康祐+蜂飼耳(司会) 共催:中原中也の会
25日	第193回 中原中也を読む会 屋外展示「鳥の詩」(前期)——「閑寂」「夜明け」を読む
10月11日	中也忌関連イベント YCAMシネマ連携事業 『海辺の映画館 キネマの玉手箱』アフタートーク (YCAM)
17日	中也忌特別展示 中原中也原稿「野卑時代」 (～25日)
22日	中也忌 メッセージ募集、職員による募参
23日	第194回 中原中也を読む会 中也忌関連企画 中原中也「骨」「一つのメルヘン」を読む
28日	特別展示:第25回中原中也賞 水沢なお「美しいからだよ」 (～11月23日)
11月7日	空の下の朗読会 自由参加の朗読 おおかた静流ライブ (サポート:向島ゆり子)



空の下の朗読会 カニエ・ナハさんのパフォーマンス

11月7日	第25回中原中也賞贈呈式 受賞詩集:水沢なお「美しいからだよ」 記念講演「中也と鉄道」 講師:原武史 主催:山口市、(公財)山口市文化振興財団 (湯田温泉ユウベルホテル松政)
18日	企画展Ⅱ「中也の住んだ町——鎌倉」 (～2021年4月11日)
27日	第195回 中原中也を読む会 企画展Ⅱ「中也の住んだ町——鎌倉」見学
12月1日	山羊の日特別展示(～13日) 中原中也原稿「春の夕暮」
10日	第5回「ぼうしの詩人賞～あつまれ! 未来の中也たち!～」 入選作品展示 (～2021年2月28日)
13日	第5回「ぼうしの詩人賞～あつまれ! 未来の中也たち!～」 表彰式・入選作品朗読会 (クリエイティブスペース赤れんが)
25日	第196回 中原中也を読む会 福田百合子名誉館長と 中也の詩「無題」(「山羊の歌」より)を読む
2021年1月22日	第197回 中原中也を読む会 山口の詩人・和田健の詩を読む
23日	中原中也の詩を方言にして読む(オンライン)
2月17日	第18回テーマ展示 「君に会いたい。——中原中也の友情」 (～2022年2月13日)
18日	開館27周年
26日	第198回 中原中也を読む会 テーマ展示「君に会いたい。——中原中也の友情」見学
27日	オンライン公開講演「今、読む、中也。」 伊藤比呂美と高橋源一郎による対談 (ゲスト:小島日和)
3月2日	特別展示「坂口安吾の震災体験——中也の関係者が語る関東大震災Ⅲ」 全国文学館協議会加盟館共同展 「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画 (～3月28日)
26日	第199回 中原中也を読む会 屋外展示「鳥の詩」(後期)——「雲雀」「朝」を読む
31日	館報第26号発行



中原中也賞贈呈式記念講演



オンライン公開講演

中原中也の会

2020年7月31日	会報第48号発行
9月12日	中原中也の会第25回大会「2020年に読む中原中也」(オンライン) 第1部 研究発表 発表-1 吉田恵理 発表-2 中原豊 第2部 詩人トーク 「詩はどこへ向かうのか?——2020年に読む中原中也」 カニエ・ナハ×杉本真維子×三角みづ紀×四元康祐+蜂飼耳(司会)

2021年1月31日	会報第49号発行
	第25回大会 詩人トーク



第25回大会 詩人トーク

中也忌

当館では毎年、10月22日の中也の命日前後に「中也忌」と称してイベントを行ってきましたが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、募前祭や「中也に捧げる夕べ」のコンサートを中止しました。そのかわりに、館内やホームページ等で「中也へのメッセージ」を募集し、中也の命日に職員が募りにお供えしました。また、館内で中也の直筆原稿「野卑時代」の特別展示を行いました。

なお、中也の命日にあわせ、YCAMシネマ連携事業として、中也の詩がたくさん登場する大林宣彦監督の映画『海辺の映画館 キネマの玉手箱』が10月1日～31日の間、YCAMにて上映されました。10月11日には、中原豊館長によるアフタートークも開催。中也に思いをはせながら、映画と文学にひたる秋のひとつときになりました。



『海辺の映画館 キネマの玉手箱』アフタートーク
写真提供:山口情報芸術センター
photo:塩見浩介

空の下の朗読会

例年中也の誕生日4月29日に行う空の下の朗読会ですが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で11月7日の開催となりました。今年度の朗読は16名の方に参加していただきました。第25回中原中也賞贈呈式のために初めて山口市へ来られた受賞者の水沢なおさん、第21回受賞者のカニエ・ナハさんも参加。水沢さんは受賞詩集から「美しいからだよ」を朗読、カニエさんはコロナ禍ということでも話による無音のパフォーマンスでした。小雨降る中、初めての方、常連の方の朗読が続き、集まった90名の方が聞き入っていました。朗読会後はシンガー＆ボイスアーティストのおおかた静流さんによるライブ。ヴァイオリン・向島ゆり子さんとの息もぴったりで、中也の「早春の風」「六月の雨」などを披露されました。



空の下の朗読会

出前授業

2020年12月19日、山口市の三和児童館にて、「中也の詩に親しむ 中原中也ってどんな小学生だったのかな?」と題して小学生向けの出前授業を行いました。参加者は児童館に通う山口市内の小学生とその保護者計12名で、コロナ対策のため3回に分けて授業を行いました。

最初に当館の職員から中也の生涯や当館について説明したあと、中也の詩が載っている絵本「声にだすことばえほん サークラス」(編)にしむら あつこ(絵)、子ども版声に出して読みたい日本語 4 (齋藤孝(編)、田中健太郎(絵))を



出前授業
写真提供:三和児童館

みながら、「サーカス」「汚れつちまつた悲しみ」……を全員で音読し、詩のリズムを楽しみました。

また授業後には、別室で好きな詩を書き出すワークが用意されていましたが、中也の詩に触発され、自分で詩を創作する参加者もいました。

中也の詩の面白さを積極的に発言したり、配布した「中也読本」に興味を持つ小学生も多く、短い時間ながら、子どもたちの豊かな感性がきらめく、充実した内容となりました。

◎第26回 中原中也賞

『水際』

小島日和氏



第26回の中原中也賞は、公募および推薦による268詩集の中から、小島日和氏の『水際』七月堂が選ばれました。

小島氏は1997(平成9)年生まれの23歳(受賞時)。早稲田大学文化構想学部在学中の2019年春から詩作を始め、卒業後、およそ一年間に書いたものをまとめた詩集『水際』をインカレポエトリ叢書シリーズの一冊として刊行し、今回の受賞に至りました。

受賞詩集は、表題作を含む21篇の詩が収められています。選考会では、大きな可能性を秘めていると同時に、発展段階の個性が十分発揮されている点が高く評価されました。

小島日和『水際』は、のびやかでなめらかな言葉を駆使して、日常の現実の時間を手さぐりで描く。母親、父親、故郷など、作者が捨ててきた分厚い過去の歴史を再現しようとする試み。詩句が成立する背景の物語が大きく、ここにはやわらかな作者の声が明確にある。

Nakahara
Chūya
prize 26th



底のない穴のなかを

エスカレーターが動いている

上っているのか 下りているのか

とにかく、逆向きに乗ってしま

遠い国のデパートのように

段差がなく平らになっているので

ベルトコンベアで運ばれているようでもあり

ほうれん草の束が滑り下りてきて

そちらが上かと知るのだが

反対側からも転がってくる鶏肉を

腕に抱えこもうとするなら降りねばならない

どこかからやってきた子どもが

扉の前に座りこみ

一本ずつ指をしゃぶっている

(「選評」より)

(「エスカレーター」より)

◎ 2021(令和3)年度 記念館事業・関連行事予定

2021年4月-2022年3月

展示

企画展Ⅱ
「中也の住んだ町——鎌倉」
(2020年11月18日～2021年4月11日)

第18回テーマ展示
「君に会ひたい。
——中原中也の友情」
(2月17日～2022年2月13日)
※特別企画展期間を除く

企画展Ⅰ
「中也、この一篇
——「正午」」
(4月14日～7月25日)

特別企画展
「書物の在る処
——中也詩集とブックデザイン」
(7月29日～9月26日)

企画展Ⅱ
「雑誌「詩園」
——中也・山頭火と山口の文学青年たち」
(9月29日～2022年4月17日)

第19回テーマ展示
「中也の本棚——日本文学篇」
(2022年2月16日～2023年2月中旬)

イベント・記念日

生誕祭 空の下の朗読会
(4月29日 中原中也記念館前庭)
〈無料開館日〉

中也忌
中也命日・お墓参り
(10月22日)
〈無料開館日〉

山羊の日
(12月10日) 第1詩集「山羊の歌」刊行日

開館28周年
(2022年2月18日)
〈無料開館日〉

中原中也を読む会

毎月 第4金曜
中原中也記念館等

中原中也の会

中原中也の会第24回研究集会
(5月16日 オンライン)

中原中也の会第26回大会
(9月11日 ホテルニュータナカ)

中原中也の会第20回セミナー
(9月12日 ホテルニュータナカ)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、日程変更や中止の場合がございます。